

日経平均株価は5日続伸し、約1ヶ月ぶりに10,000円台回復

2010年6月16日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部  
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

## 欧州の財政赤字問題への懸念の後退とともに、徐々にリスク資産へマネー回帰の動き

前日に米格付け会社による国債格下げを受けたギリシャ市場では投資家の懸念が根強く、アテネ株価指数は反落し、同国の10年国債利回りは約1ヶ月ぶりに9%台へと上昇しました。しかし、アイルランドやスペインの国債入札が無難に終わったことから、欧州の財政赤字問題への懸念が和らぎ、ユーロを買い戻す動きが優勢となりました。これを受けて投資家心理は徐々に改善し、ギリシャの国債格下げによる他市場への影響は軽微にとどまりました。欧州株式市場では多くの国の主要株価指数が5日続伸し、中でもスペインやイタリアの株価指数はそれぞれ+1.6%、+2.0%の大幅高となりました。米国株式市場も終日堅調に推移し、NASDAQは4日連続で大幅続伸したほか、NYダウやS&P500もともに大幅反発となりました。ユーロ上昇に伴う投資家心理の好転に加え、NYダウやS&P500が200日移動平均線を上回ったこともテクニカル面で買い戻しを誘う一因となりました。商品先物市場では原油や非鉄金属が軒並み上昇し、為替市場でも資源国通貨が軒並み高となるなど、安全資産に逃避していたマネーが徐々にリスク資産に回帰する様子が窺える相場展開でした。

ただし、欧米のマクロ経済指標は予想を下回るものが目立ちました。6月のNY連銀景況指数は前月比で上昇したものの事前予想を小幅に下回り、6ヶ月先を示す景況指数は2ヶ月連続で低下しました。欧州でも欧州各国における財政赤字削減策が景気回復の足かせになるとの懸念等から、6月の独ZEW景況感指数が前月比で予想外に急落し、08年10月以来の大幅悪化となりました。

## 日経平均株価は1ヶ月ぶりの10,000円台回復も、閑散相場は続く

海外株高や円安進行を背景に日本株は大幅高で始まり、日経平均株価は10,000円台を回復して寄り付きました。ほぼ全面高の展開で9割近くの銘柄が上昇となりました。中でも相場をけん引役したのは主力の輸出関連株で、海外市場での円安進行が好感されたほか、世界的な株高や資源高を受けて市況関連株も堅調でした。しかし、高く寄り付いた後はほとんど動きが見られず、日経平均株価の前場の変動値幅は30円程度にとどまりました。ただし、後場に入ると先物主導で上げ幅を一気に広げ、日経平均株価は一時10,100円台に乗せる場面がありました。市場では内外年金ファンドによる買い観測が広がっていましたが、この動きに伴うヘッジファンドの買い戻しが株価上昇に拍車をかけたとの見方もありました。その間、現物市場では朝方から堅調だった市況関連株などに加えて、金融や不動産などの内需関連株にも買いが広がりました。ただし材料に乏しい中、すぐに10,100円を下回るなど、上昇の勢いも限定的でした。結局、日経平均株価は5日続伸し、約1ヶ月ぶりに10,000円の台を回復しましたが、中国や香港などアジア市場の一部が休場とあって市場参加者は乏しく、盛り上がりには欠ける相場展開でした。

足元での世界的な株価の戻りは過度の不安感後退に伴うショートカバーの動きが中心で、日本株式市場の出来高も閑散した状態が続いています。欧州の財政問題は解決に時間がかかる上、国内でも新政権の財政再建策等の政策運営を見極めたいとの見方も強いことなどから、買い戻し一巡後は上値の重い展開も予想されます。

以上